

第49回 労働リーダーシップコース開催報告

金属労協組織総務局部長 上口 智子

2017年10月12日から28日まで、京都・関西セミナーハウスにおいて、第49回労働リーダーシップコースを開催した。北は栃木県から南は広島県まで総勢35名(内、女性3名)の受講生が研鑽に励んだ。

第49回の日課ー

朝はまず、天気の確認から

2013年の第45回から開催時期を1月から10月に変更した時、もうこれで天候とインフルエンザを心配する必要がなくなると、安堵した記憶がある。しかし今回は、台風に加え、毎日のように雨が降り、空模様の心配が絶えなかった。

朝は7時15分に駐車場に集合し、運動不足と健康維持のため、ラジオ体操と周辺の散歩を行う。10月開催になってからは、雨に降られることはめったになかったが、今回は、様子が違った。まず、朝起きて初めにすることは、天気の確認からだった。カーテンの間から外を覗くと、雨、今日も雨……。体操・散歩の予定全9回中、外で体操ができたのが5回、散歩までできたのが4回(1回は途中で雨が降ってきたため散歩は

中止)だけだった。また、比叡山登山、鞍馬山散策などレクリエーションも雨の影響を受け、直前まで実施が危ぶまれた。3週目の月曜日の夜、残り1週間を元気に乗り切る英気を養うため予定していたバーベキューも、前日に直撃した台風の余波で風が強く、あえなく水曜日に延期となった。このように雨の多い第49回だったが、それだからこそ終わってみると、とても印象深い第49回になっていた。

10月12日(木)ー開校式

静寂の中、篠笛(森田玲・玲月流初代)の演奏で開校式が始まった。冒頭、香川孝三校長(神戸大学名誉教授)が「来年で50回の節目を迎える伝統あるコースで、2週間半にわたる合宿研修を通じて、将来の日本の労働運動を支える力を養ってほしい」と激励した。次いで、名誉校長である松岡敬同志社大学学長の挨拶の



開校式で決意表明を読み上げる受講生代表

後、主催者を代表して金属労協の高倉明議長が挨拶に立ち「ゼミナールを中心に生涯にわたる仲間づくり、座別を超えた人脈づくりをしてほしい。運営委員の先生方をはじめ多くの方々の協力を得て50年にわたる歴史を歩むことができた。今の現実をしっかりと踏まえた上で、労

働リーダーシップコースを継続していくことを約束します」と述べた。

その後、来賓の厚生労働省の本多則恵総合・政策評価審議官、金属労協関西ブロック山本一志代表、労働リーダーシップコース石田光男副校長(同志社大学教授)から挨拶をいただき、最後に受講生を代表して、本田技研労働組合中央執行委員の池田智香子さんが「新しい労働運動の担い手となるべく最後まで真摯な学ぶ姿勢を持ち、お互い励ましあいながら研鑽に励みます」と力強く決意表明を行った。

座学だけではないプログラム

プログラムは座学中心であるが、一般的な講義だけではないプログラムもコースの魅力の一つとなっている。ここでは、そのうち三つに絞って紹介する。



貿易ゲームで初めての共同作業



講義風景（特別講演「経営と人間」堀場会長）



金属労協三役と楽しく語り合った「特別討論会」



第48回修了生の寄贈品BBQセットでBBQを堪能

①ゼミナール

ゼミナールは「時代の求める労働組合の役割」を総合テーマに、労働組合・職場の課題を指導教授や受講生同士で解決案を探索する。5つのテーマに分かれ4回にわたり討議を重ね、最後にゼミナール毎にパワーポイントを使って発表を行い、成果を共有しあった。各ゼミナールのテーマと概要は次のとおり。

◎香川ゼミ

『労働組合と国際』～21世紀国際社会における労働組合の役割

国際社会におけるグローバル人材をテーマに、グローバル人材が必要になってきた背景を探るとともに、海外赴任者、外国人労働者、女性の雇用などに焦点をあて、労働組合としての課題について討議した。

◎石田ゼミ

『労働組合と職場』～職場からの新たな雇用関係の構築

同一労働同一賃金が叫ばれる中、日本の雇用関係・制度の実態、事例をもとに今後のあるべき姿を検討、組合役員としてどのように会社へ提起すべきか等、討議した。

◎中田ゼミ

『労働組合と社会』～仕事と処遇
納得性のある給与の決め方と水準

賃金制度の特徴と課題、賃金制度の比較をしながら、課題への対策案について討議した。

◎富田ゼミ

『労働組合と働き方』～ワーク・ライフ・バランスと多様な働き方

労働組合が考える働き方改革をテーマに、働き方改革に関する実態・課題・解決策を検討するとともに、

労働組合としてとるべきアクションについて討議した。

◎上田ゼミ

『労働組合と企業』～グローバル化の時代、企業社会の変貌と労働組合機能
働き方改革に向けた労働組合の関わり方をサブテーマに、労働時間をめぐる社会の状況・職場の実態、先進的な取り組み事例を探るとともに、自分たちの考える問題意識、労使協議のあり方について討議した。

②特別講演

経営者の方をお招きして実施している特別講演「経営と人間」は、経営者ご自身の経験談、経営哲学や人生観、次世代への提言などざっくばらんに語っていただく場となっている。これは1969年の第1回から続いているプログラムで、第1回の講

師は松下幸之助氏（当時の松下電器産業株式会社社長）だった。今回の講師である株式会社堀場製作所代表取締役会長兼社長の堀場厚氏は講義の中で、堀場製作所の事業内容、社是である「おもしろおかしく」を実現するための具体的な活動、社内コミュニケーションのあり方、徹底した「人財育成」などについて語られた。

③特別討論会～三役と語ろう～

前回の第48回から、受講生同士で討論しあう「討論会」とは別に、金属労協議長・副議長と語り合う「特別討論会」三役と語ろう」を取り入れた。語り合うテーマは受講生の中から選出した討論会実行委員会で検討し、「政治活動への取り組み」「女性活躍の取り組み」「職場委員・支部委員の役割」とは「組合費」「ワーク・



ライフ・バランス実現のための労働時間短縮の取り組み」の5つに絞られた。始めて会う産別のトップに若干緊張しながらも、約2時間、しっかりと意見交換を行っていた。今回は、10月22日に急ぎよ衆議院議員選挙が施行されたため、日程の変更と時間短縮をよぎなくされたが、「組合役員として大事なことを再認識する場となった」「貴重な体験だった」との感想が寄せられるなど、短い時間でも充実した討論ができたようだった。

仲間づくり

金属労協傘下の労働組合から参加している受講生は、ほとんどの人が

「はじめまして」の状態で開催式を迎える。労働リーダーシップコースは今どき珍しく、1室2名が原則の全期間合宿制をとっている。初めて会った人と2週間半、寝食を共にする中で、一番大切なことは「仲間づくり」である。そのため、自己紹介をする前に行うグループ形成を目的としたゲームや、無言の中で行うフィンガー・ペインティングなど、コースの前半に心を通わせるプログラムを取り入れている。また、期間中にできるだけ多くの人と交流が持てるように、受講生が自分たちで話したいテーマを決めて行う討論会や交流会なども行っている。開校式当日はぎこちなかった会話も2週間半の共同生活の中で打ち解け、閉校式を迎えるころには「バカ話やまじめな悩みなど共通した会話を味わえた」との感想も聞こえていた。

運営側からは仲間づくりのための場の提供はできるが、それをどう活かすかは、受講生次第である。朝の体操の前に行く点呼では、体操担当が胸の前でハートを作りながらの点呼を促し、最後に「35ハートいただきますました！」と叫び、笑顔をさそうなど、それぞれのアイデアにより一体感が高まっていった。



35名全員が無事修了。全員で卒業の記念写真

10月28日(土) — 閉校式

閉校式では冒頭、式辞として香川孝三校長(神戸大学名誉教授)が「2週間半のゼミ等を通じて学んだ見識と合宿研修で培った人間関係を大切にして、50周年の時にまた全員で再会したい。ここで得たものをベースに将来の日本労働運動を支える人材とされることを期待している」と激励し、35名全員に修了証書を授与した。その後、ゼミナール担当講師の石田副校長(同志社大学教授)、中田運営委員(同志社大学教授)、上田運営委員(同志社大学教授)が挨拶に立ち、修了生を激励した。受講生代表としての答辞では、小倉英

明校長(ダイハツ労組中央執行委員)が14日間の思い出と今後の決意を表明した。最後に「卒業の歌」を全員で合唱し、閉校式を終了した。

49年間の歴史と目指すもの

第2回コースの閉校式で故竹中丈夫初代校長が「これからの労働組合は、労働者の全人格的成長をめざす必要があると思う」と述べている。これがまさしく労働リーダーシップコースの教育方針「4本の柱にもとづき全人格的教育をめざす」にも繋がっている。4本の柱とは、「縦—自分の立つ歴史的背景」「点—自分の立つている場」「横—自分の住む世界のひろがり」「深—自分の生きる基礎」の4つの視点について学ぶというこのコースの基本概念である。この教育方針、基本概念を49年間常に念頭に置き、しかし時には時代の変化に合わせてプログラムにも変更を加えてきた。現在、様々な変革のスピードが増し、社会人教育でもすぐに仕事に役立つもの、いわゆるノウハウものが好まれる傾向にあるなか、労働リーダーシップコースは逆行しているのかもしれない。コースの周年記念誌を見ると、「コースの目指すべき1番目は、主体的・応答的な人間をつくること。すなわち、すぐ解決を与え

実行委員会

各ゼミナールから班長、副班長を各1名互選し、計10名で実行委員会を編成する。実行委員会の中から1名級長を互選する。コースは受講生の主体的な運営を基本とし、実行委員会がその中心となる。第49回コースの実行委員会メンバーは以下のとおり。



全体ミーティングで選出された実行委員

級長／小倉英明（ダイハツ労組）

副級長／新田幸弘（パナソニックエコソリューションズ労組西日本営業支部）、岡 悠司（全本田労連）、石井秀一（日本電気労組）、横堀慎一（パナホーム労組）
 実行委員／中西健仁（全労済愛知推進本部）、山根浩二（マツダ労組）、大岡彩子（パナホーム労組）、角野友則（パナソニックコネクティッドソリューションズ労組）、宮端整吾（本田技研労組鈴鹿支部）

第49回 労働リーダーシップコースを終えて



労働リーダーシップコース校長
 神戸大学・大阪女学院大学名誉教授
香川 孝三（かがわ・こうぞう）

今回は35名の受講生が参加し、無事修了しました。これで1692名が修了したことになります。次回の50回には1700名を超えることになります。例年通り、受講生の積極的なセミナーへの参加に

よってスムーズな運営がなされたことに感謝いたします。

最近では政府の主導によって賃上げ率が決められたり、働き方改革と称して法規制を強化したり緩和したりされています。本来ならば労使の話し合い（団体交渉）によって処理していくべき労使間の問題が、法律によって一律に決められる傾向になってきています。上から法律によって網をかぶせる方が効率よいのかもしれませんが、それだけで問題は解決しません。下から話し合いで積み上げる方法は時間がかかるかもしれませんが、下からの積み上げをなくすことはできません。この下から積み上げる人材を養成するのが労働リーダーシップコースの狙いです。

今回もリーダーとなる素質を持った受講生が講義、ゼミ、発表会、レクリエーション、討論会、交流会でその素質を発揮してもらいました。これから日頃の職場での問題解決にその素質を生かして努力してもらいたいと期待しています。

るものを丸暗記する教育ではなく、かなり多角的に自分自身で考える、一緒に問題解決していく人間をつくること」と記されている。様々な方面から学習し、自分自身で考える力、血となり肉となる知識を学ぶ場を作る、これが49年前に労働リーダーシップコースを開校した諸先輩方の理念だったのだろう。先に記したよう

に、当然時代と共に内容を見直すべきものもあるが、このコースが目指すべき姿、教育方針、理念はこれからも引き継いでいきたい。

いよいよ次回、第50回

第49回を終了し、労働リーダーシップコース（旧西日本コース）の修了生は、通算1692名となり、旧東

日本コース（第1〜40回）の939名と合わせて、2631名となった。

次回、記念すべき第50回は2018年10月11日（木）〜27日（土）の日程で開催する。第48回から始めた三役との特別討論会「三役と語ろう」も大好評であることから引き続き実施するなど、座学だけではなく受講生がたくさんのヒントを持ち帰れる

よう、大いにディスカッションできる環境づくりなど工夫したい。また、広くコースの趣旨、合宿研修の魅力を知っていただくため、オープンカレッジも継続していく。さらに開設50周年を迎えることから、周年記念行事の検討も行っていく。